2014年6月13日　統計数理研究所　オープンハウス

調査票デザインに関する実験調査

土屋　隆裕　データ科学研究系　准教授

【実験の目的】

　自記式調査では、調査票のデザインが回答に大きく影響することはよく知られている。適切な調査票デザインは、調査内容を回答者に正しく伝えたり、誤記入を減らしたりする上で重要であり、そのため調査票の設計においては細心の注意が必要である。

　本研究では、回答者が自記式調査票に回答するときの視線を視線追跡装置を用いてデータ化し、調査票の設計に活かすための方法を探る。

【実験の方法】

　調査票としては、内閣府が月次で実施している消費動向調査を用いる。消費動向調査では従来留置調査法が採用されていたが、平成２５年４月に郵送調査法に切り替えられた。そこで本実験では留置調査と郵送調査の調査票を用いて、両者の比較も行う。

調査対象：機縁法による対象者１６名（留置調査票８名、郵送調査票８名）。消費動向調査の調査票を見たことがない者を対象者とした。

調査期間：平成２６年３月

調査方法：調査票をディスプレイ上に１ページずつ表示し、回答してもらう。ただし回答は調査票に直接記入する代わりに、口頭で選択肢の番号等を言ってもらい、実験者がそれを記録する（したがって、必ずしも実際の回答状況と同一ではない）。回答中の視線を視線追跡装置（Tobii X-120）で記録する。

【実験の結果】

　ここでは得られた結果の一部を紹介する。まず図1.は郵送調査票の表紙である。表紙に記載されている様々な注意事項等は、回答者によってはほとんど読んでいないことが分かる。

図1.　郵送調査における表紙の視線追跡結果

　図2.と図3.は消費動向に関する項目である。郵送調査票では選択肢を丁寧に見ているのに対し、留置調査票では選択肢に視線があまり向けられていない。選択肢の並びに関して容易に想像がつくことや、どのような順序で表形式を見ればよいのか分かりにくいことなどが原因と考えられる。

　郵送調査票では、今後の物価の見通しの選択肢はあまり注視されず、質問文に視線が集中している。この質問の意図や内容を理解するには時間がかかることが示唆される。

　留置調査票では旅行の実績・予定の回答欄に視線が集まっており、表形式の回答欄の構造は直ちには理解しにくいことがうかがえる。

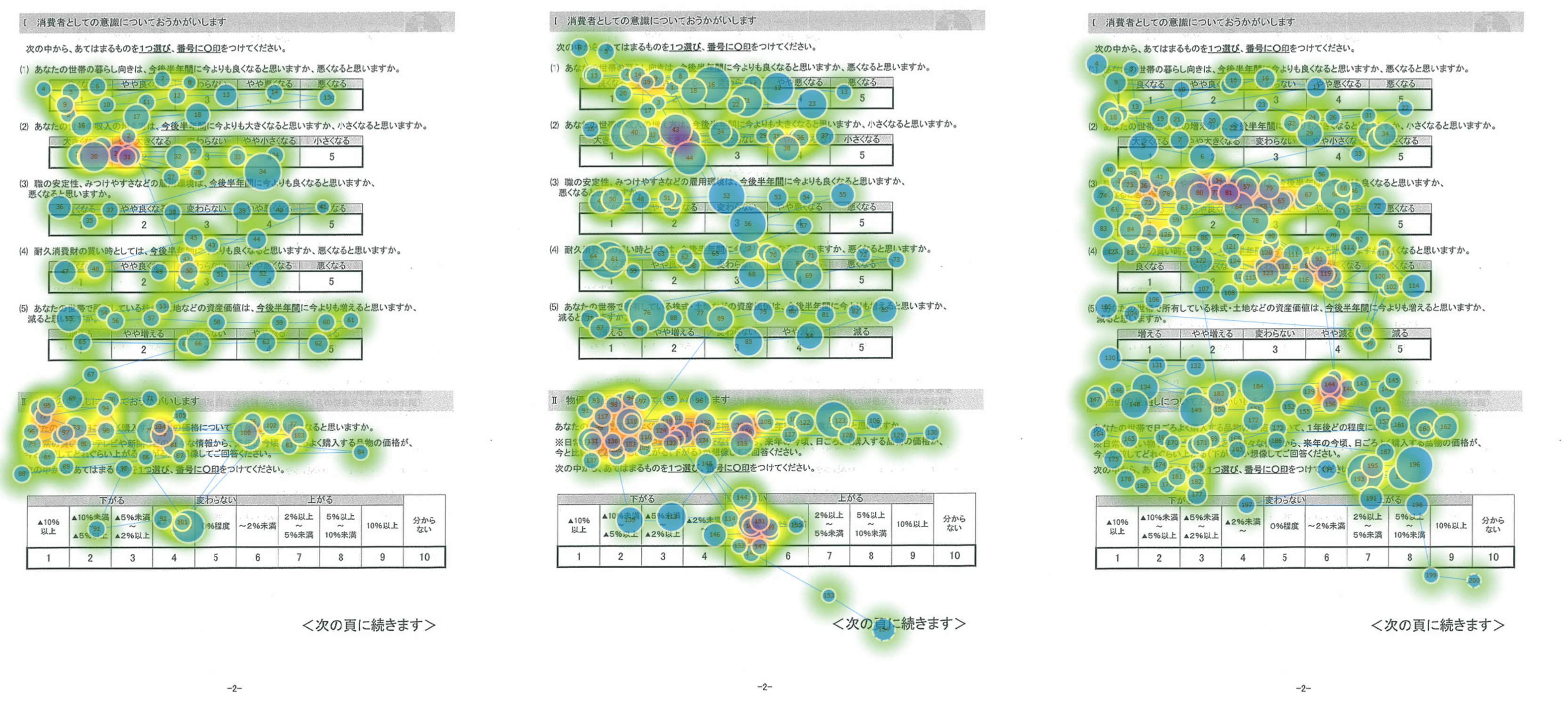

図2.　郵送調査における「消費動向」の視線追跡結果

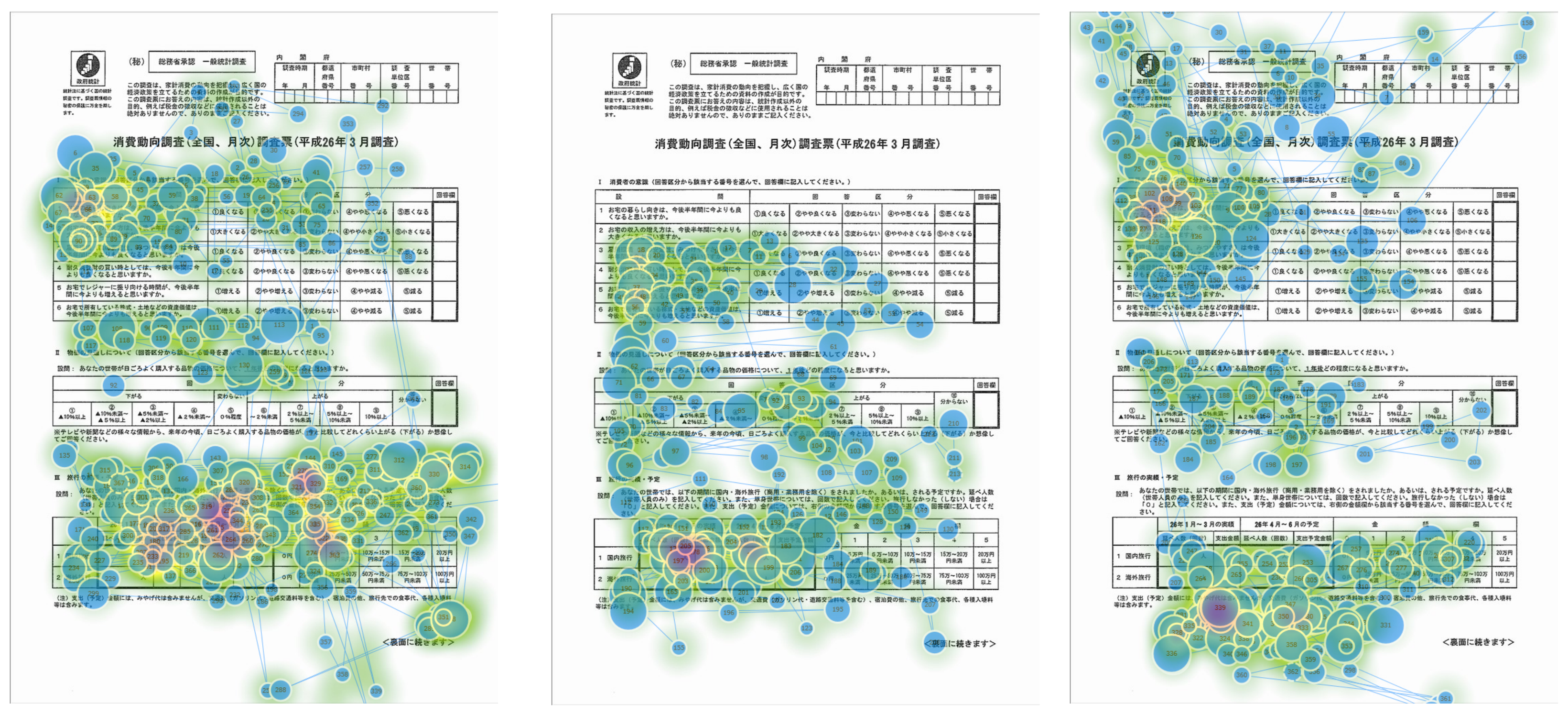

図3.　留置調査における「消費動向」の視線追跡結果

　図4.は郵送調査における今後の支出予定に関する項目である。回答選択肢は「増やす」から「減らす」までの５段階と「支出予定なし」の６つであるが、回答者の視線は「支出予定なし」まで届いていない。回答者によってはこの選択肢を見落とすかもしれない。

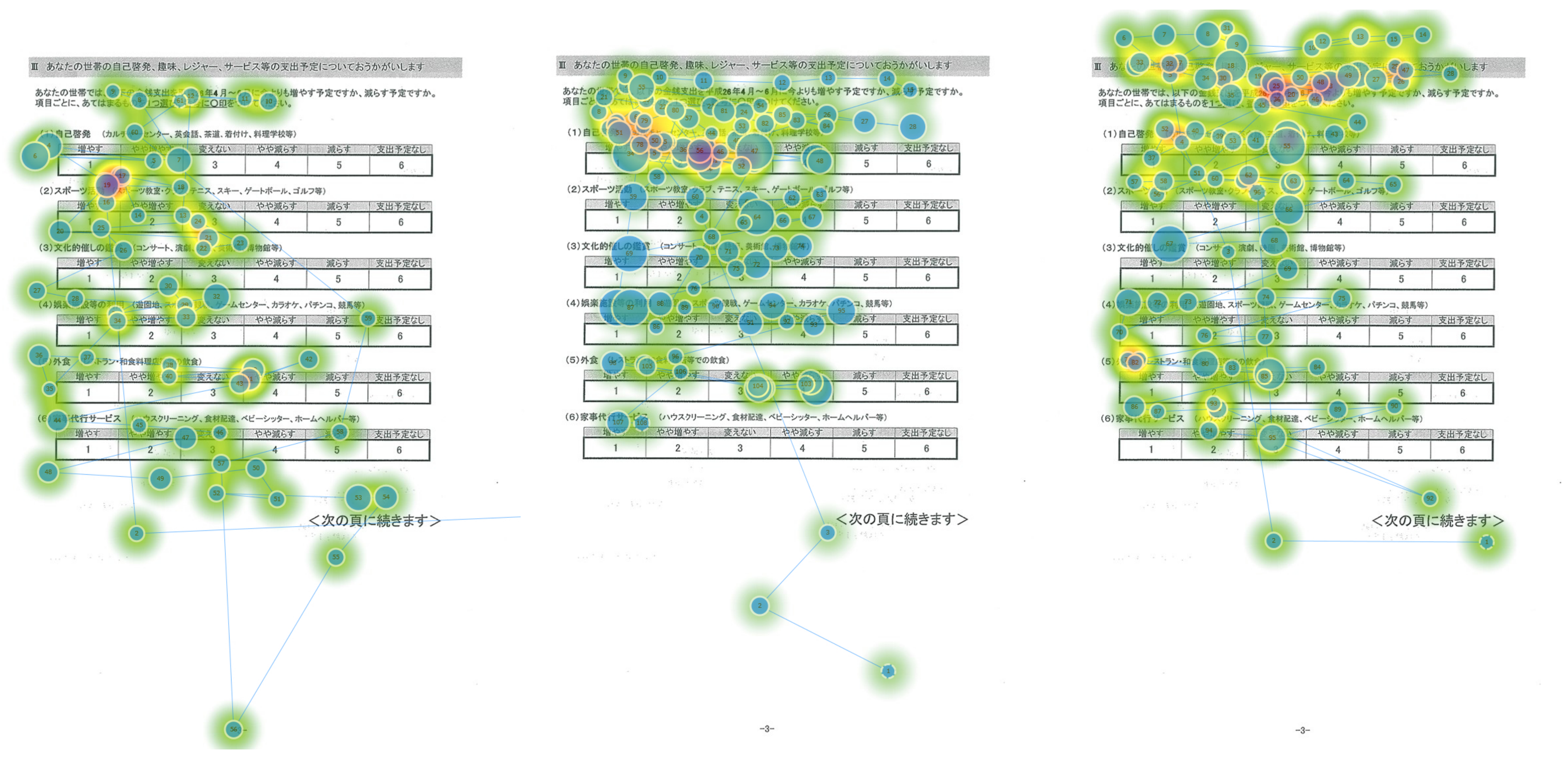

図4.　郵送調査における「今後の支出」の視線追跡結果

【まとめ】

　郵送調査票は調査員が介在しないため、留置調査票と比べ、より改善が図られていることがうかがえた。